

博士学位申請論文審査報告書

西南学院大学大学院

国際文化研究科長 宮崎 克則 様

■ 論文題目

「日韓国際結婚家庭に関する研究—アイデンティティと言語を中心として—」

■ 学位申請者： S21DK002 梁 正善氏 (YANG Jeongseon)

■ 指導教授： 韓景旭

1. 審査の経緯

梁正善氏から博士学位申請論文が提出されたことをうけ、2022年10月14日に宮崎克則大学院国際文化研究科長より審査依頼があり、主査金縄初美、副査の韓景旭教授（指導教授）、片山隆裕教授3名による審査委員会が構成された。審査委員会の委員3名は、梁正善氏によって提出された事前審査論文を精読し、内容・形式面における詳細な指導を行い、論文に加筆・修正を加えるよう指示した。2022年12月6日に審査委員全員でリライト指示をした箇所を確認し、梁正善氏に本審査用の博士学位申請論文と関係書類を提出することを許可した。

同年12月15日、審査委員3名（主査金縄初美、副査韓景旭、副査片山隆裕）による本審査が開始され、2023年2月16日に梁正善氏の博士学位申請論文の最終審査を行うことを決定した。博士論文最終審査会において、宮崎克則大学院国際文化研究科長、審査委員3名ほかの立ち合いのもと、梁正善氏の博士学位申請論文の公開審査を行った結果、審査委員会として梁正善氏の博士学位申請論文が十分に評価に値するという結論を導き出し、その結果を本日（2023年2月25日）の国際文化研究科委員会に諮ることを決定した。

論文の内容

（1）論文の概要

梁正善氏の博士学位申請論文は、日本における日韓国際結婚家庭の親子を事例とした、アイデンティティと言語を中心に行った研究である。

日韓国際結婚家庭において、親子のアイデンティティがそれぞれどのようなプロセスを経て形成されるのかをめぐり、世代別、ジェンダー別、留学経験別にライフストーリー・インタビューと言語ポートレート手法を用いて分析を行ったものである。

研究方法に関しては、「日韓国際結婚家庭の親子」の存在を把握し、彼らがどのよ

うな人生を歩んできたかを明らかにしていくためには、未だ探求されていない社会的現実や少数事例を照射するのに有効な手法とされる「ライフストーリー研究法」が最適であると考え、また身体の線画に自分の言葉を位置付け、好きな色で描くという言語ポートレート手法を援用し、同手法がインタビューの質問だけでは得難い、深層心理を理解するのに大変有効であると位置づけている。

2018年6月から2022年12月までの間に、対面と非対面の形式でライフストーリー・インタビュー調査を行い、研究協力者によってはライフストーリー・インタビューを6回以上実施した。

(2) 論文の構成

梁正善氏の論文は計7章から構成され、各章の概要は以下のとおりである。

第1章の序論では、問題の所在、研究目的、用語の定義、および論文の構成について述べている。第2章では、理論的枠組と先行研究について述べられ、先行研究については、日韓国際結婚家庭の親と子どもをめぐる視点から概観し、その問題点について述べている。第3章では、研究方法と以下の4つの研究課題について述べている。

1. 日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティはどのように形成されるのか。
2. 世代別にみる日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成はどのように異なるのか。
3. ジェンダー(父が韓国人、母が日本人、父が日本人、母が韓国人)の違いによる日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成はどのように行われるのか。
4. 留学や移動の経験は日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成にどのような影響をもたらすのか。

第4章では、日本における日韓国際結婚家庭の変遷と現状、および韓国における韓日国際結婚家庭の変遷と現状について比較し、考察している。

第5章では、日韓国際結婚家庭の親子のライフストーリー・インタビュー調査を通じて、個人の事例から日韓国際結婚家庭における親子のアイデンティティがどのように形成されるかについての結果をまとめた。また、子どもの継承語教育と子どもの国籍と名付けがアイデンティティにどのような影響を及ぼすのかについて明らかにし、親の国籍、名乗り、永住、教育観によるアイデンティティ形成と変化についても分析調査を行っている。

第6章では、日韓国際結婚家庭の親子の言語とアイデンティティの関係を言語ポートレートで描きだしている。

第7章の結論では、研究内容を総括し、今後の課題について述べている。ライフストーリー・インタビュー調査と言語ポートレート手法を通じて、日韓国際結

婚家庭の親子のアイデンティティと言語の関係を解明することにより、アイデンティティの形成要因について検討し、以下のような結論を導き出している。

1. 日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティは、韓流ブームや韓国文化、韓国語などを積極的に取り入れることにより強まる傾向がある。
2. 国籍変更は、日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティにほとんど影響を及ぼしていない。
3. 永住による日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティは、二つの文化と言語が共存しているアイデンティティである。
4. ジェンダー別による日韓国際結婚家庭の親の名乗りには、父親が韓国人の場合は韓国名を使用し、母親の韓国人の場合は生活の利便性のため夫の日本姓を名乗る傾向がある。
5. 日韓国際結婚家庭の子どもの名前は、両国で使えそうな名前を採用し、国籍も二重国籍にしている。
6. 日韓国際結婚家庭の親が留学と移動の経験があっても、子どもへの言語と文化的アイデンティティ継承は、各家庭の状況や親の価値観、教育観などによって異なる。
7. 日韓国際結婚家庭の子どもの学校選択は、親の留学や移動の経験によるものではなく、各家庭の状況と親の教育観によって異なる。
8. 研究協力者の言語ポートレートをアイデンティティとの関連性で分析すると、頭と心臓（胸、心）に韓国語と日本語を描き、それが自分の核（中心）であることを示し、腕と手で日本語（母語ではない生活言語）を人生の道具として位置づけ、足（脚）に自分の礎である母語を、日本語や韓国語を描いていた。

結論として、日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティは二つの言語と文化が共存・融合しているアイデンティティ、つまり「共存アイデンティティ」といえる。そして、こどものアイデンティティは、幼少期に継承語（韓国語）教育が保持できなくても、家庭生活の中での飲食や韓国の行事など、言語以外の韓国文化によって影響・維持されていることが示された。これらのことから、日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティは言語によって形成されるだけでなく、言語以外の文化的要素によっても決定されていることが判明した。

韓国文化や韓流ブームの影響などを通じて、日韓国際結婚家庭のアイデンティティが形成され、また子どもは大学生となり、第二言語として韓国語を学ぶことにより、継承語との距離感を縮めていることもうかがえる。まだ成長段階にある日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティは、親の価値観や教育観により学校選択や継承語教育にも影響を及ぼしていると指摘する。

今後の課題としては、個人の日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティの可変性と流動性についての理解を高めるためには、長期的な継続調査が必須であると指摘した。

3. 論文の評価と課題

梁正善氏の博士学位申請論文は、「日韓国際結婚家庭」における親と子の両者を対象に、言語継承とアイデンティティはどのように構築されていくのかについて、ライフヒストリー・インタビューと言語ポートレートの研究方法を通じて考察したものである。

本論文では、国際結婚家庭における継承語教育や言語以外の文化の維持や教育状況を通じ、親と子の関係の変化や子のアイデンティティの変化と要因を捉えている。その結果、日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティは二つの言語と文化が共存・尊重している状況がみられると考察された。さらに筆者はそのアイデンティティのあり方を「共存のアイデンティティ」とよび、親の「共存のアイデンティティ」は子のアイデンティティに影響を与えると結論付けている。調査方法もライフヒストリー調査と言語ポートレートが有効に用いられており、これまで明らかにされてこなかった言語と深層心理の関係性に踏みこんだ研究が試みられており、国際結婚家庭のアイデンティティ研究に一定の貢献がみられる。本論文は調査家族に対する丹念な聞き取りをもとに研究されており、本研究を可能にしているのは梁氏自身の語学能力の高さや日韓交流活動での経験によるところが大きい。今後、子どものアイデンティティを継続的に調査することで、さらなる研究の発展も期待できる。

最終審査会では、国籍変更はアイデンティティに影響を与えないという結論への再考、本論文で取り上げられている「文化的アイデンティティ」の形成と変化はバルトによって提唱された「状況的アイデンティティ」概念など理論を援用することによってさらに詳細な分析が可能である点、研究対象として調査をした家庭が概ね高学歴夫婦によるものであるため、この家族状況が日韓国際結婚家庭を代表できるのかといった点が指摘され、筆者はこれらの問題に丁寧に回答した。

以上の評価に基づいて、審査委員会は、本論文は問題提起、方法論、考察において梁氏の独自性がみられることを評価し、博士学位論文としての価値を有していると判断した。

2023（令和5）年2月25日

審査委員会

主 査： 金 繩 初美

副 査： 韓 景旭

副 査： 片山 隆裕